



Title	5年間の教訓
Author(s)	敦賀, 和外; 本庄, かおり; 安藤, 由香里 他
Citation	GLCOLブックレット. 2016, 18, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55591">https://hdl.handle.net/11094/55591</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 4-5 5年間の教訓

### 敦賀和外・本庄かおり・安藤由香里・片山 歩

最後に、5年間の事業を通して得られた教訓を幾つか述べます。

一点目は、海外体験型教育の対象に関してです。GLOCOLの設立目的が大学院生の学びに重点を置いていたため、当然のことながらFIELDOの企画するプログラムは大学院生対象のものが多くなりました。他方で、海外FSやISに関心を示すのは圧倒的に学部生が多かったのが実態です。学部生に対してもっと多くの海外体験型教育プログラムを提供すべきだったのではないかと感じています。

二点目は、理系学生へのアプローチです。大学院生にとっては研究に密接した実習であることが重要であり、理系の学生にとって魅力あるプログラムにするためには、やはり理系部局との連携が欠かせません。GLOCOLには理系出身の教員が少なく、独自のプログラム開発は容易ではありませんでした。

三点目は、海外体験型教育の評価に関してです。FIELDOの教員には教育学を専門としているものはおらず、それぞれ専門分野の知識や人脈を活用しながら運営してきたのが実態です。そのため、海外体験型教育の効果をどう測るのか、適切な事前学習の在り方や事後学習の構築などは、まさに走りながら試行錯誤してきた感があります。今後、海外体験型教育の学術的発展と同時に、プログラム構築の専門家育成が望まれます。

四点目は、プログラムの実施に関する具体的な事項です。受注型企画旅行にすべきか手配旅行にすべきか、受け入れ先をどう持続的に確保するのか、事前学習、情報収集の時間をどのように担保するのか、細かく挙げればきりがありませんが、まだまだ改善の余地はありそうです。

海外体験型教育は、大学のグローバル化に伴って、今後、より重要性を増していくでしょう。大学によっては、海外体験型教育を必修化するケースや看板プログラムとして積極的にアピールすることも想像に難くありません。しかし実態を見れば、一部の教員が過度な負担を抱えている、予

算が不足している、リスク管理の体制が整っていない、他の講義や活動との関係で学生が海外渡航できる期間が限られているなど、改善すべき点は山積しています。